

自分で考える防災 子供たちに伝える

祈りの先に 4

新潟県三条市の小学校教諭、霜崎大知(28)は内心、子供たちに興味を持ってもらえるのか自信を持てずにいた。

3月4日、同市立月岡小学校の防災特別授業で用意した教室のディスプレイには、田村孝行(61)、弘美(59)夫妻と宮城県大崎市Ⅱが映し出されていた。東日本大震災の津波で亡くなった長男健太(当時25)との思い出や、日頃から避難場所を確認しておく大切さを語った。

耳を傾けたのは、震災時に0〜1歳だった小学6年の児童約60人。震災の記憶はほぼなく、歴史を学ぶようなものになりはしないだろうか。



田村夫妻とのオンライン授業で児童たちに語りかける霜崎大知さん(3月4日、新潟県三条市の月岡小学校、本人提供)

だが、授業後の感想には「今の生活って当たり前じゃないんだ」「いざという時のために持ち物をそろえたい」とのコメントが並んだ。

霜崎は高校2年の春休みから、宮城県内の被災地でボランティア活動を始めた。田村夫妻と出会ったのは大学4年だった2016年秋。銀行の跡地近くの慰霊碑前で、弘美から声を掛けられた。

その後教諭になり、防災教育に力を入れることにした。新潟も過去には大きな地震や水害に見舞われている。被災地に通った経験が生きて考えた。

夫妻に出てもらおうよう頼んだ

には理由がある。健太は職場の上司の指示で建物の屋上にとどまり続け、犠牲になった。大災害が起きたとき、学校でも同じようなことが起こり得るとの懸念があった。

「集団生活を送る学校はトッブダウンの組織。仮に避難の判断が間違っていると感じたとき、子供や若手の自分たちが伝えられるだろうか」

ディスプレイ越しの弘美は「指示を待つだけではなく、おかしいと思ったら意見をはっきり言える人になってください」と強調していた。

霜崎は昨年、同校の防災教育主任になった。他の学年でも使えるよう、クイズ形式で防災を学べる教材を作り始めている。

(福岡龍一郎)